

【一般の部受賞作】

瀧野川尋常高等小学校における大正新教育の実践について

—本田正信の教育思想を中心に—

あしな しょうか
足名 笙花

論文要旨

本稿は1920～1930年代にかけて流行した「大正新教育」と呼ばれる教育運動について、公立小学校である瀧野川尋常高等小学校第2代校長山崎菊次郎と、訓導本田正信の教育活動と教育思想から、明らかとすることを目的とした論文である。

大正新教育に関わる先行研究は、師範学校附属小学校や私立小学校に関する論考が目立つ。しかし公立小学校における新教育の実践も近年では注目されてきており、特に小学校の訓導たちによる研究論文や研究会、座談会などの対外的活動に焦点を当てることにより、公立小学校の事例研究だけでなく、日本における新教育活動の実態を分析することが可能となる。

第1章では、瀧野川小学校における新教育を概観しつつ、山崎が行なった学校改革や新教育実践に焦点をあて、瀧野川小における新教育が衰退した理由は、国からの圧力が原因であったという定説に対し、中学校や女学校への受験志向が主な理由である、という見方を提示した。

第2章では、瀧野川小学校で新教育実践を行なったうえで山崎が出版した『新総合教育の実践』の4章「総合学習に依る実践報告」の大部分が、瀧野川小や深川小で「山崎先生のシンクタンク」であった本田正信の著述であることを発見した。

以上の発見から、瀧野川小の新教育は、奈良女子高等師範学校附属小学校訓導木下竹次の合科教育の影響を受けており、『新総合教育の実践』の序文も木下が記しているが、4章の「総合学習に依る実践報告」のほとんどを本田が記していることを考えると、その本田は瀬川頼太郎の「集団主義教育」の思想の影響を受けているため、木下の「合科教育」の影響だけでなく瀬川が、瀧野川小や本田に多大なる影響を与えたことは間違いがないという結論に至った。

なお本田の深川小転出後の足取りを調査する中で、教職追放の可能性や、山口県教育委員会広報誌への掲載、晩年の地方新聞への寄稿、台湾の教育雑誌である『第一教育』の発見など、今後の調査研究によっては、新教育研究、特に公立校教員の実践研究や思想研究に対して何らかの方向性を示す研究になるのではないかと考えられる。